

タイトル	北海道における中小企業家同友会の教育(4)
著者	竹田, 正直; TAKEDA, Msanao
引用	開発論集(96): 1-15
発行日	2015-09-30

北海道における中小企業家同友会の教育(4)

竹田 正直*

はじめに

北海道における中小企業の政策研究にとって、着実に発展をとげ、道内経済にますます大きな影響をあたえている北海道中小企業家同友会の分析は欠かすことができない。すでに経営者会員は、2015(平成27)年7月31日現在で、5,876名に達している。2010(平成22)年6月18日閣議決定された「中小企業憲章」の制定など日本政府の中小企業政策に一定の影響を及ぼしてきている中小企業家同友会全国協議会(中同協)の全国会員、44,465名(2015年7月1日現在)のうち、北海道同友会は13.2パーセントを占め、全国第1位の組織数を誇っている。この組織的発展のかなめとなっているのが、「共育」をキーワードとした社員教育や経営者の自己教育、とくに、幹部養成の「同友会大学」の教育である。

「北海道における中小企業家同友会の教育」のテーマで、筆者は同友会大学の発足の経緯や理念、また、同友会の活動全般とともに同友会大学の発足を主導した一人である大久保尚孝氏(北海道中小企業家同友会初代事務局長、専務、中同協社員教育委員会委員長、中同協副会長等歴任、故人)の活動の一端を分析してきた。(注1)

これまでの第1期～第2期同友会大学の分析をもとに、本稿では、第3期と第4期同友会大学の分析を行う。

第1章 北海道中小企業家同友会第3期同友会大学

(1) 第3期同友会大学の日程と講義概要

第2期同友会大学は、1981(昭和56)年7月7日(火)に入学式を行い、同年11月5日(火)に卒業式を行っているが、第3期同友会大学は、第2期から2ヶ月後の1982(昭和57)年1月12日(火)入学式、同年5月13日(火)に卒業式の日程で実施された。会場は、同じく、第一ビルの同友会事務局会議室である。

第3期同友会大学の日程、単元構成と単元テーマ、講義テーマと担当者などの概要は、「資料1」で知ることができる。(注2)

講義回数は、入学式、5単元(各単元3～5講義)、総括講義、卒業式を入れて31回でこれ

* (たけだ まさなお) 北海学園大学開発研究所特別研究員、北海道大学名誉教授

資料1 北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム（第3期）

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
1982年 1月12日(火)	開 校 式	◎校長あいさつ，教育委員会の紹介， ガイダンス ◎班編成の発表，性格・職業興味検査， 一般教養テスト	
14日(木)	単元Ⅰ 日本経済と中小企業	◎戦後日本経済史と中小企業の位置づ けについて	北海道教育大学 教 授 三好 宏一氏
19日(火)	〃	◎世界の政治・経済情勢の焦点	北海道大学 助教授 佐々木隆生氏
21日(木)	〃	◎北海道経済の歴史と産業構造の特徴	北海道大学 助教授 山田 定市氏
28日(木)	単元Ⅱ 経営に関する法律問 題	◎法とは何か～判例にみる法の運用の 研究	札幌商科大学 教 授 鈴木 敬夫氏
29日(金)	〃	◎商取引に関する法律知識 (1)	弁護士 山中 善夫氏
2月2日(火)	〃	〃 (2)	同 上
4日(木)	〃	◎労働法の基礎知識	札幌商科大学 教 授 鈴木 敬夫氏
9日(火)	〃	◎債権の管理・回収について (1)	弁護士 向井 清利氏
16日(火)	〃	〃 (2)	同 上
18日(木)	単元Ⅲ 企業会計の基礎知識	◎バランスシートの読み方	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏
23日(火)	〃	◎企業税務の基礎知識	税理士 加城 忠重氏
25日(木)	〃	◎資金繰り表の作り方 (1)	税理士 平田 清二氏
3月2日(火)	〃	〃 (2)	同 上
4日(木)	〃	(特別講義) 企業の実力を判断する為には？ 危い会社の見分け方	(株)帝国データバンク 札幌支店長 大宮 辰男氏

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
3月9日(火)	単元Ⅳ 現代営業幹部論	◎営業とは何か	札幌第一興業(株) 専務 武田 耕作氏
11日(木)	〃	◎目標の設定と達成の手順と方法 (1)	(株)北海道共同印刷所 社長 木野口 功氏
16日(火)	〃	〃 (2)	(株)サッポロインテリア 社長 矢ヶ崎博義氏
18日(木)	〃	◎営業幹部の任務と役割	(株)札幌白衣 社長 山内 幹旺氏
23日(火)	単元Ⅴ 科学技術論	◎科学と人間～自然科学の発展と哲学の根本問題～	北海道大学 教授 田中 一氏
25日(木)	〃	◎現代の技術革新はどこまで進んでいるか ～社会の発展と技術の歴史～	北海道大学 助教授 荒川 泓氏
30日(火)	〃	◎コンピューターの基礎概念 ～情報化時代への対応～	北海道大学 教授 青木 由直氏
4月1日(木)	〃	◎中小企業の技術開発, その発想と具体例	(株)光合金製作所 社長 井上 一郎氏
6日(火)	〃	◎生産管理について ～作業管理, 品質管理, 工程管理など～	北海道工業大学 教授 川島 正治氏
8日(木)	単元Ⅵ 中小企業幹部論	◎幹部に必要な現代のマナー (1) ～営業と職場のマナーの再点検～	北海道同友会 事務局長 国吉 昌晴氏
13日(火)	〃	◎幹部に必要な現代のマナー (2) ～話し言葉の再確認～	HBC 苫小牧支局長(元 HBC アナウンスアカデミー所長) 平沢 秀和氏
15日(木)	〃		札幌商科大学 教授 方波見雅夫氏
20日(火)	〃		北海学園大学 教授 後藤 啓一氏
23日(金)	〃	◎これからの幹部に要求される幹部の資質と自己啓発の目標	山崎建設工業(株) 社長 山崎初三郎氏
27日(火)	総括講義	◎中小企業の未来と私たちの課題	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏

※ 卒論の提出

※ 卒業式は総括講義後2週間目に行う 5月13日(木) 18:00～21:00

資料1 出典: 国吉昌晴事務局長責任編集『同友会大学第三期生記録集, 闘志』, 北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行, 1982年7月, 14～15頁。講義のテーマの1部は空白である。

までと同様である。また、毎週、火曜日と木曜日の夜、18～21時も変わらない。

単元のテーマ、第Ⅰ単元「日本経済と中小企業」、第Ⅱ単元「経営に関する法律問題」、第Ⅲ単元「企業会計の基礎知識」、第Ⅳ単元「現代営業幹部論」、第Ⅴ単元「科学技術論」、第Ⅵ単元「中小企業幹部論」も、単元ごとの講義回数も変わらない。

講義の回数は、入学式と卒業式は、希望講師が自由に出席して激励するが、その2回を除く合計で29回の講義回数である。全体として、この29回の講義を25人の講師で担当することは第2期と同じだが、詳細に見るといくつかの変更が見られる。

大学関係者は、第2期の9名で11回担当から、第3期は10人で11回の講義担当に変化している。すなわち、第2期では、第Ⅲ単元の法律問題の鈴木敬夫教授氏（札幌商科大学、現札幌学院大学）と第Ⅴ単元科学技術の荒川助教授（北海道大学、後に教授）が、それぞれ2回の講義を担当していたが、第3期では、鈴木教授はそのまま2回の講義を担当しているが、荒川助教授は1回の講義となり、かわって第3期から田中一教授（北海道大学）が担当している。田中教授はこのあと長期に同友会大学を担当することになる。

弁護士は、2名で各2回計4回の講義は同じであるし、税理士2名で3回の講義も変わらない。しかし、経営者講師は、第2期の9名9回の講義から、第3期では8人8回の講義と、1名1回分の講義が減少している。その1回分を同友会事務局長国吉昌晴氏（現、中同協顧問）が、第Ⅵ単元の幹部教育の講義を担当している。

(2) 第3期同友会大学の受講生

第3期同友会大学の受講生は、入学式では、58名だった。第2期生の受講は39名だったので20名近くも増加した。この増加は、第1期、第2期の同友会大学が、同友会の新聞紙上でももちろんのこと、一般のマスコミでも盛んに報じられたことや、経営者や事務局の努力、冬期間という北海道では比較的営業活動の落ち着いた期間であること、札幌以外に、千歳（1名）、江別（2名）、砂川（1名）、美唄（2名）からも受講者があったことなどに依るであろう。（注3）

砂川からの受講者は、冬の雪道を帰宅すると、午前零時を回ることもあるという。また、美唄から通った受講者が皆勤賞を得ていることにもあらわれている受講熱意は大変なものである。第3期の皆勤賞は22名で、実に卒業生48名のうちの46パーセントにあたる。

卒業認定は、「80%以上の出席率で尚且つ、経済、法律、会計、営業、科学技術論の5つのレポートと、卒論の平均点が50点以上の者」である。また、レポート採点のポイントは、「第1に、提起されたテーマに真正面からぶつかって、それを本質的に論じているか」、「第2に、部分的技術的ではなく、総合的全面的、且つ創造的であるか」、「第3に、自分の独自の表現、新しい論理展開になっているかどうか」である。（注4）

したがって、受講生にとっては、このレポートと卒論の執筆が最も困難な課題であった。

受講生の中には、日曜日毎に市立図書館に通い続け、すっかり趣味になり、さらに家族ぐる

みで休日は図書館に通うことになったという受講生もいた。また、突然、勉強を始めた父親を見て、最初はいぶかしがった奥さんや子どもたちも、夕食後、テレビを消して、一家中が机に向かう習慣を確立した家庭もあった。4月の人事移動の時期に重なったため、卒業論文を新任地で書き上げ郵送してきた受講生も2人いた。中には、5月13日の卒業式直前に結婚式を予定し、卒論執筆と結婚式準備が重なり、その上、体調を崩して入院となり、病院のベットで「科学技術論」のレポートと卒論を仕上げ、「二つの式」を無事こなし受講生もいたとのこと。(注5)さらに、卒論を書く時期に風邪をひき、熱にうなされながら卒論を書き上げたという受講生も、こんなに辛かったのは生まれて初めてだという。

(3) 第3期同友会大学卒業生への祝意と激励

1982年5月13日(木)、午後6時から卒業式と懇親会が行われた。

まず、同友会大学学長・社員教育委員長の関口功四郎氏が「本当の闘いはこれから」と式辞を述べた。

“ご卒業おめでとうございます。第3期は、58名と一番入学者が多く、私も何とか全員卒業できたらと思っていたのですが、残念なことに10名の落第者が出てしまいました。

しかし、ご卒業された48名の皆さんには様々な苦労を突破してご卒業された事を、ご本人はもちろん、会社の方々をはじめ、ご家族の皆さんも、大変喜ばれたことでしょう。そして何もまして素晴らしいことは、皆さんの中に自信と誇りが満ちたことではないでしょうか。学校で学び、社会というもうひとつの大学で学び、そして同友会大学で仕上げをし、一回りおおきくなった自分を見つけたのではないのでしょうか。皆さんが本大学で培った力は、いつか企業の大きな力に転化されていくこと、そして同友会が、社会の発展に貢献できたことに意義がある、と私は感じております。ですから、皆さんに渡された卒業証書は、他のどんな卒業証書よりも、価値があるものです。

しかしながら、その卒業証書に、より一層の重みをつけるのはこれからです。勉強してきた事を、実践の中で生かして行ってこそ、本物になっていくのですから、これからは本番だと肝に命じて下さい。

会社から大きな期待をかけられている皆さん。私は、皆さんに、企業がこれから歩んでゆくための、足元を照らすたいまつになってほしいと切に願っております。本当の闘いはこれからです。是非、何事にも負けずに闘い抜いて行ってほしいと思います。

最後に、卒業された皆さんのこれからのご健闘と、企業のますますの発展を心よりお祈り申しあげます。”(注6)

なかなか行き届いた式辞である。連日残業せざるを得ない中小企業の幹部の立場で約5ヶ月間、毎週2回、午後6時から9時までの講義のために、5時の定時退社をし、帰宅は深夜近くになり、予習・復習とともにレポート5本と卒業論文を書き上げるために、日曜・祝祭日も学習しての卒業にたいし、深い祝意とその意義、そして今後への激励を述べている。

多少、気になるといえば、「社会の発展に貢献」との方向性が示されているが、後に次第に、同友会幹部に浸透していく同友会大学など同友会での社員教育は、企業を超えた「全人間的な教育」を目指すことがまだ弱いという点である。「社員教育は、全人間的な教育でなければ、教育とは言いません。社員教育を“すぐ商売に直結する教育に”と考えがちですが、それでは教育とは言いません。」(注7)

北海道中小企業家同友会代表理事石山博規氏が同友会を代表して祝辞を述べている。「第3期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。卒業式に臨まれる皆さんは、入学式の時よりも2倍も3倍も大きく見えます。(中略)人間、苦勞しなければ、本当の力はつきません。諺にも、“苦勞は金をだしても買え”というのがありますが、苦勞の中にこそ、自分を成長させる源があるのです。また、苦勞して、事を成しとげた後は、とても気持ちの良いものです。(中略)卒業した後も、同友会の精神である“共に知り合い、学び合い、援けあう”という事を忘れずに、これからも交流を深めていていただきたいと思います。これからの皆さんの健闘を心よりお祈りいたします。」(注8)

ついで、講師のひとりである札幌商科大学教授鈴木敬夫氏が祝辞を述べ、レポートを書くために身に付けた読書習慣を今後も守り、広い視野で自己の考えを客観視して欲しい、また、予見の立たない時代といわれているいまこそ、自分に確信を持って欲しいと語りかけた。さらに、第2期生同期会世話役として(株)住まいのクワザワ取締役営業部長吉田永氏が、祝辞を述べ、人間は自己啓発の連続で一步一步成長してゆくことが大切である。第3期生が入ると卒業生は116人になる、同期会では、①3、4ヶ月に1度会合し勉強する、②同友会活動に参加し社内で学ぶ機運を創る、③年1度1泊研修会をもつ、のでこれからも共に学んでゆこうと訴えた。

(4) 第3期同友会大学卒業生の特別表彰と評価

第3期卒業生の特別表彰は次の通りである。

優等賞(5つのレポートと卒業論文の平均点80点以上)：伊藤俊彦氏(株)瑞穂でんき産業社)、努力賞(同上の平均点75点以上)：菅野新一氏(ダイヤ冷暖(株))、岸本道太郎氏(株)日本除雪機製作所)、西谷昇次郎(株)サッポロインテリア)、林真弘(共和紙業(株))、横田稔(株)ユタカ商会)、渡辺裕暢氏(株)ストアエージェンシー)、敢闘賞：渡辺昭一氏(中空知自動車整備共同組合)。

さらに皆勤賞が、上記の優等賞と努力賞の7名をふくむ22名であった。

卒業認定及び特別賞の選考は、基準にもとづいて社員教育委員会が行っているが、その全体評価は厳しいものであった。

社員教育委員会の評価と討議にもとづいて、卒業式で成績講評を述べた大久保尚孝専務は、「第3期生は、第1期、第2期生と比べるとおしなべて、成績が振るわなかったと言わざるを得ません。たいへん厳しい事を言うと思われるかかも知れませんが、この事は、第3期生からは、最優秀賞を受賞する卒業生が出なかったということにも表れております。しかしながら、受講態度は、48名中、22名皆勤という数字からもうかがえますように、比較的、真面目に受講

されていたと言えます。ただ、講義はおとなしく、真面目に聞いているのですが、何か迫力が欠ける、つまり、講義中に出る質問の数・質から見てみると、今一つ水準が低かったといえます。(中略)今期は、砂川から1人、美唄から2人、江別から2人、千歳から1人と、遠いところから通って、みごとに卒業された方々がいらっしゃいましたが、この方々には心より敬意を表したいと思います。」(注9)

なお、48名中22名の皆勤賞は、卒業生の45.8パーセントと高い受賞率であるが、第2期生も35人中17名の皆勤賞で48.6パーセントと、この点でも第2期生におよばなかった。

第3期同友会大学については、全体として成功したと言える。受講生が大きく伸びたこと、札幌以外からの参加が7名もあり、「北海道」同友会にふさわしい広がりを見せたこと、講師陣についても新しさを出す努力がなされたこと、中小企業の経営や勤務時間の厳しさや卒業条件の厳しい中、受講生の83パーセントにあたる48名の卒業生を出したこと、企業や家族の暖かい支援があったことなどをあげることができる。

第2章 北海道中小企業家同友会第4期同友会大学

(1) 第4期の日程と講師及び受講生

第4期同友会大学は、第3期終了後、2ヶ月弱を経て、1982年7月6日(火)から11月4日(木)までの、毎週火曜日、木曜日の週2回、18～21時、第一ビル同友会会議室で、講義回数29回、入学式と卒業式で2回、計31回で実施された。入学者は51名であった。

6つの単元のテーマや回数は、「資料2」にみるように第3期と同じである。ただし、担当者別に見ると若干の変化がある。大学関係者の10名11回は変わらないし、経営者の8名8回も同じである。弁護士は、第3期の2名4回から、3名4回となり、税理士も2名3回から2名2回となった。また、同友会事務局が2名3回から2名4回となった。つまり、大久保尚孝専務が、単元Ⅲ、企業会計の講義を1回から2回へとふやしたことである。

新たに担当者となったのは、単元Ⅱ、法律問題で、弁護士の中村仁氏で、「日本国憲法の成立と今日的意義」という新設された新しい講義テーマを担当することになった。同友会社員教育委員会が、この時点で中小企業の発展にとっても、また、何よりも全人間的教育のために日本国憲法の講義の重要性を認識した事の表れである。高い先見性を有していたと言える。

経営者で2名が新しく担当することになったが、単元Ⅳ、営業幹部論の(株)エミヤ商会社長(後に北海道同友会代表理事)三神純一氏と単元Ⅵ、企業幹部論の北海道紙工業(株)専務澤田三尚氏である。講義テーマは、それぞれ、前任者のものを引き継いでいる。

第4期生も、卒業認定条件はこれまでと同様で、80パーセント以上の出席率と5つの単元の5本のレポートと卒業論文の平均点が50点以上である。

受講者のレポートへの取り組み姿勢について、(株)とんでん販売益川弘副社長が、「大学には我社から第2期から第4期までの間に6名受講させましたが、全員無事卒業させていただきました

資料 2 北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム（第4期）

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
1982年 7月6日(火)	開 校 式	◎校長あいさつ，教育委員会の紹介， ガイダンス ◎班編成の発表，性格・職業興味検査， 一般教養テスト	
8日(木)	単元Ⅰ 日本経済と中小企業	◎戦後日本経済史と中小企業の位置づ けについて	北海道教育大学 教授 三好 宏一氏
13日(火)	〃	◎世界の政治・経済情勢の焦点	北海道大学 助教授 佐々木隆生氏
15日(木)	〃	◎北海道経済の歴史と産業構造の特徴	北海道大学 助教授 山田 定市氏
20日(火)	単元Ⅱ 経営に関する法律問 題	◎日本国憲法の成立と今日的意義	弁護士 中村 仁氏
22日(木)	〃	◎商取引に関する法律知識	弁護士 山中 善夫氏
27日(火)	〃	◎債権の管理・回収について (1)	弁護士 向井 清利氏
29日(木)	〃	〃 (2)	同 上
8月3日(火)	〃	◎法とは何か～判例にみる法の運用研 究～	札幌商科大学 教授 鈴木 敬夫氏
5日(木)	〃	◎労働法の基礎知識	同 上
10日(火)	単元Ⅲ 企業会計の基礎知識	◎経営分析 (1)	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏
12日(木)	〃	〃 (2)	同 上
17日(火)	〃	◎企業税務の基礎知識	税理士 加城 忠重氏
19日(木)	〃	◎資金繰り表の作り方	税理士 平田 清二氏
24日(火)	〃	(特別講義) 企業の実力を判断する為には？ 危い会社の見分け方	(株)帝国データバンク 札幌支店長 大宮 辰男氏

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
8月26日(木)	単元Ⅳ 現代営業幹部論	◎営業とは何か	札幌第一興産(株) 専務 武田 耕作氏
31日(火)	〃	◎目標の設定と達成の手順と方法 (1)	(株)共同印刷 社長 木野口 功氏
9月2日(木)	〃	◎営業幹部の任務と役割	(株)札幌白衣 社長 山内 幹旺氏
7日(火)	〃	◎目標の設定と達成の手順と方法 (2)	(株)エミヤ商会 社長 三神 純一氏
9日(木)	単元Ⅴ 科学技術論	◎科学と人間～自然科学の発展と哲学の根本問題～	北海道大学 教授 田中 一氏
14日(火)	〃	◎現代の技術革新はどこまで進んでいるか ～社会の発展と技術の歴史～	北海道大学 助教授 荒川 泓氏
16日(木)	〃	◎コンピューターの基礎概念 ～情報化時代への対応～	北海道大学 教授 青木 由直氏
21日(火)	〃	◎生産管理について ～作業管理, 品質管理, 工程管理など～	北海道工業大学 教授 川島 正治氏
28日(火)	〃	◎中小企業の技術開発その発想と具体例	(株)光合金製作所 社長 井上 一郎氏
30日(木)	単元Ⅵ 中小企業幹部論	◎幹部に必要な現代のマナー (1) ～営業と職場のマナーの再点検～	北海道同友会 事務局長 国吉 昌晴氏
10月5日(火)	〃	◎幹部に必要な現代のマナー (2) ～話し言葉の再確認～	HBC 苫小牧支局長(元 HBC アナウンスアカデミー所長) 平沢 秀和氏
7日(木)	〃	◎部下をどう教育するか (1) ～“知恵”のある人間を育てるために～	札幌商科大学 教授 方波見雅夫氏
12日(火)	〃	◎部下をどう教育するか (2) ～現代人の社会心理と組織の活かし方～	北海学園大学 教授 後藤 啓一氏
14日(木)	〃	◎これからの幹部に要求される幹部の資質と自己啓発の目標	北海道紙工業材料(株) 専務 澤田 三尚氏
19日(火)	総括講義	◎中小企業の未来と私たちの課題	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏

※ 卒論の提出

※ 卒業式は総括講義後2週間目に行う 11月4日(木) 18:00～21:00

資料2 出典: 国吉昌晴事務局長責任編集『同友会大学第四期生記録集, 限りなき明日へ』, 北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行, 1983年1月, 12～13頁。

た。時々私は、社員と一緒に出張しますが、ある時同行した社員が、『ホテルはシングルをとって欲しい』と言いました。いつもはダブルなのですが、いうとおりにして、夜中にそっと様子を見に行ったところ、ねじりはち巻で同友会大学のレポートを書いているのです。その時私は非常に感激しました。同友会大学の厳しい教育を受ける中で、勉強する土壌が確実に培われているのを感じました。私も幹部社員に負けないように経営者大学の全コースに挑戦したいと思います。」(注10)

入学者が51名で、上記の厳しい卒業条件をクリアして晴れて11月4日に卒業できたのは38名、これは入学者の75%で卒業率は、過去最低である。しかし、のちに見るように卒業者の成績はけっして低いものではないし、皆勤賞も23名で卒業者の60パーセントで、2期や3期と比較して極めて高い。さらに、今回も札幌以外から受講した苫小牧の2名と江別からの1名も卒業している。卒業率が最低でも、卒業者の成績がけっして低くなく、皆勤率は高いというなかで、卒業率最低の要因として考えられるのは、ゼロサム時代と言われた経済の停滞の中でプラマイゼロのしわ寄せが中小企業に押し寄せ、専務、部長、さらに課長クラスが多数を占める受講者の中で、入学時の意志や見通しに反して、出席できなかつたりレポートを提出出来なかつたりして結局認定基準をクリアできなかったのではなかろうか？ その点では、成績でも出席でも、卒業者と非卒業者の格差が大きかったかもしれない。

なお、今回の入学者には、第1期を受講したが諸事情で卒業出来なかつたので再チャレンジした方もおり、今回は見事卒業し、社員教育委員会のメンバーを感激させた。このケースを励みに、今後再チャレンジ受講は出てくる可能性がある。良いことである。

(2) 第4期の単元レポートと卒業論文の課題

すでに、受講生からは、卒業のための80パーセント以上の出席条件もさることながら、何よりも5つの単元夫々のレポート提出(夫々提出日切日設定)と卒業論文執筆の大変さが何度も語られている。ここでは、これらのテーマについて、第4期のテーマを例に見ておきたい。5つの単元で、複数の課題が提起されている場合は、そのうち1つの自由選択である。

なお、第VI単元「中小企業幹部論」は、最終単元のため受講期間内にレポート提出はできないことと卒業論文執筆期間の確保のためにレポート課題は設定されていない。

第I単元「日本経済と中小企業」

- イ) 戦後日本の高度経済成長を支えた要因は何か。その中での中小企業政策の位置づけを述べよ。
- ロ) 現代資本主義世界の同時不況はなぜもたらされたか。戦後世界におけるアメリカの役割・地位の変化を軸としながら論述せよ。
- ハ) 現在「北海道経済自立論」が盛んに論じられているがその背景は何か。北海道経済の真の繁栄について思うところを述べよ。

第II単元「経営に関する法律問題」

- イ) 文部省昭和22年発行「新しい憲法のはなし」を読み、日本国憲法の成立とその今日的意義をどのように考えるか、思うところを重点的に述べよ。
- ロ) 「三菱樹脂事件」に関する最高裁判決について現行憲法の精神に照らし、貴方の考えるところを述べよ。

第III単元「企業会計の基礎知識」

- イ) 別紙企業の3期連続決算資料（実際に2頁分の決算資料の提示あり一竹田）に基づいて右側中段の財務比率を算出してください。
- ロ) 財務比率を参考にし、当社がどのような経営内容にあるのかについて見解を述べて下さい。

第IV単元「現代営業幹部論」

貴社の営業力を飛躍的に高めるためには何が必要か。自社の営業力を分析し、その課題と解決策、展望を重点的に述べよ。

第V単元「科学技術論」

科学技術の発達が、人間社会の進歩と繁栄に真に貢献しうる為には、どのような条件が必要か。

「卒業論文」

中小企業は、日本経済の現在から未来にかけてどのような役割を担わされているか。その役割を果たすために幹部としての貴方の責任と課題は何か。

夫々、講義した内容と関連しての課題設定ではあるが、確かに、なかなかの難問である。もちろん、課題は第3期と異なっている。レポートの採点基準は、①提出された問題に真正面から取り組んでいるかどうか。そして、問題の本質を捉え、徹底的に分析しようとしているかどうか。②問題を、発展的に捉え、又、広く総合的につかんでいるかどうか。又、創造的な姿勢で取り組んでいるかどうか。③自分独自の表現で書き、新しい論理が展開されているかどうか、である。(注11)

かなりの難問を、このように厳しい採点基準で高得点を取ることは、なかなか難しいことであるが、第4期生の中には、高い評価をえている受講生も多い。日本国憲法の成立のレポートに対して「観点が一貫し、かつ論点の把握が鋭い。よくまとまっている」(中村仁氏、弁護士)、三菱樹脂事件最高裁判決に関し、「論点がよく把握されており、法律論としてもよく展開されている」(中村仁氏、弁護士)、との高い評価もある。企業会計のレポートに関し、「最高点は98点でしたが、そのレポートには降参しました。講義を担当した私を含めて、専門家でもなかなか書けないとおもえるほど、精密な仕上がりでした。」(大久保尚孝氏、同友会専務、元第一銀行勤務、現みずほ銀行)という専門家が「降参」するほどの優れたレポートも提出されている。

(3) 第4期生の卒業、表彰、祝意と激励

第4期の同友会大学の卒業式は、1982年11月4日、午後6時から開催された。

まず、同友会大学学長・社員教育委員長の関口功四郎氏が卒業式式辞を述べた。関口学長の式辞は、後に発刊された第4期生記録集『限りなき明日へ』の巻頭に「苦しい時こそ真価を發揮しよう」とのテーマで掲載されている。関口学長は、景気の冷え込みが中小企業にとっては長い冬の到来を感じさせるが、心を熱く燃やしその氷を溶かすのも中小企業の使命である。そのためは、企業の質、“人の質”の向上が大切で、それを目指して同友会大学が完全に定着してきた。第4期卒業生38人が立派な勉学の姿勢を身に付け、苦しい時こそ、真価を發揮し、未来を照らすことができる実力を益々蓄えて欲しい、と祝意と激励を述べた。

次いで、北海道同友会代表理事・㈱サンコー社長三浦隆雄氏が、栄えある卒業を支えてくれた経営者、先輩、同僚、後輩、家族などの暖かい心の人びとへの感謝の気持ちを持ち続け、より一層勉学を深め、一生懸命勉強を続けて欲しいと激励した。また、講師の鈴木敬夫教授や第2期生同期会代表吉田永部長の激励もあった。

祝辞の終了後、38人、一人づつに卒業証書が授与された。さらに、特別表彰が行われた。優等賞（5本のレポートと卒業論文の平均点80点以上）：大沢真津子氏（㈱共同印刷、現㈱アイワード）、和田克則氏（㈱ユタカ商会）。努力賞（平均点75点以上）：伊藤三治氏（㈱日本除雪機製作所）、新谷悦男氏（明電興業㈱）、管原睦夫氏（㈱瑞穂電気産業社）。

皆勤賞は、上記の大沢、和田、新谷、管原各氏を含む23名であった。

「最優秀卒業論文」に選ばれた大沢真津子氏（㈱共同印刷総務部長、現、㈱アイワード取締役専務）の卒業論文テーマは、「実力を備えて新たな挑戦 ～我社を飛躍的に伸ばす営業とは、その問題点、対策、展望について～」(注12)であった。この大沢真津子氏の卒業論文について北海道同友会代表理事・㈱サンコー社長三浦隆雄氏は、「最優秀卒業論文に選ばれた㈱共同印刷の大沢さんの論文を拝見しましたが、その気迫、内容共に素晴らしく、『木野口社長、羨ましいですね』と、つい、言いたくなる程です」(注13)と卒業式の祝辞の中で述べていた。大沢真津子氏は、成績最優秀者が行う卒業生代表「答辞」も読んだ。内容は格調高く、未来への決意や中小企業の誇りなどゆきとどいたものである。「資料3」(注14)として掲載する。

実は、第4期受講生の大沢真津子氏は、入学式では受講生を代表して「決意表明」を述べており(資料3「答辞」の右下写真参照)、さらに、『第4期生記録集』では全卒業生の論文掲載を配慮しつつ各単元の優秀レポートが掲載されているが、大沢真津子氏は第Ⅲ單元「企業会計の基礎知識」の3本の優秀レポートのトップに掲載されており、このレポートは、講評で大久保尚孝氏が、企業会計のレポートの最高点は98点で、専門家でも書けないほど精密な仕上がりで講師も降参と評したレポートである(筆者確認)。

大沢真津子氏は、卒業証書のほかに、トップの優等賞と皆勤賞の特別表彰を受け、『第4期生記録集』には、「決意表明」(写真版)、「最優秀卒業論文」、「企業会計レポート優秀論文」、「答辞」と、4本の労作が掲載されており、筆者(竹田)自身もその後まもなく同友会大学講師と

資料 3

答 辞

一日毎に寒さもつり、北国の冬が間近に感じられる今日、私たち同友会大学第四期生の卒業式を迎えるにあたり、代表理事をはじめご臨席の皆さまから温情溢れるご祝辞を賜りましたことは誠にありがたく、心から感謝申し上げます。

かえりみますと、七月四日の入学以来、一日三時間、週二日の講義と六回のレポート提出という、中味の濃い充実した四ヶ月間が非常に短かく過ぎ去ったような気がいたし、感慨新たなるものを覚えております。

受講にあたりましては、期間中、私たちを熱心にお導き下さいました諸先生をはじめ経営者の皆さま、同友会事務局の皆さま、更には職場の皆さまがたの温かいお心づかいと励ましに支えられ、本日こうして晴れの卒業の光栄を得ましたことに心から御礼申し上げます。

私たちは、本校において、中小企業が国の経済に活力を与え、国民生活の豊かな繁栄に深くかかわっており、先達の苦勞と努力により、すぐれた技術力と創造力で日本経済の発展を支えてきたことを学びました。

また中小企業こそ、苦勞と喜びを共に分かち合い人間性をゆたかに成長させる場であることも知りまし

た。

しかし、今日私たちをとりまく日本経済の状況は、とりわけ中小企業にとつて、ゼロサム時代ともいわれ、何が起きても不思議でない厳しい環境下におかれております。

こうした現実の中で、企業が生き残り成長するためには、経営者も従業員も一体となって時代を見抜く確かな目を養い、困難を乗り越え、切り拓く力をつくりあげ、激変に即応しうる強靱な経営体質づくりを旨とすることが大切だと思います。

また、さらには地域社会と密接不可分に結びつき、なくてはならぬ企業として存在することに中小企業発展の鍵があるともいわれております。

私たちは、こうした企業発展のための闘いに、本校で学んだ知識を糧としながら、旺盛な開拓者精神をもって参加し、新しい時代を切り拓く力となっていきたいと思っております。

また、時代の要請に全面的に応えられる企業幹部として、今後も大いに学習を深め、総合的な力を発揮できるよう努力を重ねる所存でございます。

最後に、国の未来を創造する中小企業の構成員としての誇りと使命を忘れず、名譽ある本校の卒業生として、皆さまのご期待にそえるよう努力いたすことを誓いつつ、卒業生一同に代わり、諸先生はじめ経営者の皆さま、ならびに同友会事務局の皆さまに重ねて感謝申し上げ、答辞といたします。

一九八二年十一月四日

同友会大学第四期卒業生代表
株式会社 共同印刷
大 沢 真津子

活の豊かな繁栄に深くかかわっており、先達の苦勞と努力により、すぐれた技術力と創造力で日本経済の発展を支えてきたことを学びました。

また中小企業こそ、苦勞と喜びを共に分かち合い人間性をゆたかに成長させる場であることも知りまし



資料 3 出典：国吉昌晴事務局長責任編集『同友会大学第四期生記録集、限りなき明日へ』、北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行、1983年1月、6頁、58頁。

なり、以来、約30年経つが、このような総合的に高い評価を受けた受講生は記憶にない。

大沢真津子氏の卒業論文を高く評価して、大沢氏を部下にもつ木野口功社長を「羨んだ」北海道同友会代表理事・(株)サンコー社長三浦隆雄氏もまた、後に、自らの後継者となる(株)サンコー営業部長（後に社長、会長）山田修三氏を第4期同友会受講生として送りだし、山田修三氏はその期待に応えて「单元Ⅳ、営業幹部論」の優秀レポート「O・A時代に対応した営業力強化を」を立派に執筆して見事に卒業した。山田修三氏は、レポートの中で、O・A技術の発展に伴う新しい時代へ向けた社員の「意識改革」と「信頼される技術・信頼される人間」を前面に打ち出し、メーカーからもお客様からも常に必要とされる「サンコー」、これが会社のモットーであり、社員一人ひとりの働きを通じて、社会に、企業に、働く人仲間（家族）に幸せをもたらすこと、この「三つの幸せ」の基本を社名に込めた所以である。明るく、礼儀正しく、活気に満ちた親切的な企業に体質改善を迫ると、見事に将来展望を示していた。（注15）

このような受講生の事例をふまえて、講評で大久保尚孝氏が「卒業率は過去最低ではありませんが、卒業された方の成績は、けっして低いものではなく」と評価した。（注16）

ま と め

第1に、第3期同友会大学は入学者58名で卒業生48名、第4期は入学者51名で卒業生38人。この実績は、関口功四郎同友会大学学長をして「同友会大学が完全に定着するところまで、たどり着くことができました」と言わしめる貴重な二つの期であった。

第2に、「第3期、第4期」受講生の積極性と問題点を取りあげ、推定をふくみながらも一定の要因分析を行った。

第3に、可能な限り、受講生の息吹きや思いを取り上げ、同友会大学の初期の礎を作り上げた卒業生や講師、経営者、同友会幹部の貢献、役割を明らかにした。

第4に、その後、同友会活動、社員教育の基本概念となってゆく「共育」概念を形成してゆく部分的な実践、例えば、受講生のレポート作成への真摯な姿に刺激されて、経営者自身が経営者大学での学びを決意したことや家族ぐるみの学習等を見ることが出来た。

他方で、当時の資料の少なさや筆者の集収努力の不足から、当時の同友会全体の活動の中に「第3期、第4期」を位置づけることができなかったし、「共育」概念にかんしても、もっとも肝腎な「知識の最近接領域論」に連なる受講生相互の「共育」活動の解明が出来なかった。

注

（注1）竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育」、北海学園大学開発研究所『開発論集』、第90号、2012年9月刊、21～39頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(2)」、北海学園大学開発研究所『開発論集』、第92号、2013年9月刊、141～160頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(3)」、北海学園大学開発研究所『開発論集』、第94号、2014年9月刊、

19～32 頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育と大久保尚孝氏」, 中小企業家同友会全国協議会企業環境研究センター編『企業環境研究年報』, 第 18 号, 企業環境研究センター刊, 2013 年 12 月 30 日, 81～96 頁。

(注 2) 国吉昌晴事務局長責任編集『同友会大学第三期生記録集, 闘志』, 北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行, 1982 年 7 月, 14～15 頁。発行年月が, 奥付には「1982 年 7 月」と書かれているが, 7 月は入学式の月であり, 第 2 期の記録集の例からも, これは「1982 年 12 月」と思われる。なお, 記録集の表紙は, 「第三期生」であるが, 文中では筆者が算用数字に統一表記した。「第四期生」も同じ。

(注 3) 北海道同友会専務理事大久保尚孝「幹部としての誇りと自覚をもって期待に応えよう」, 前掲, 2 頁。

(注 4) 同上。

(注 5) 国吉昌晴「編集後記」, 前掲同, 67 頁。

(注 6) 前掲同, 1 頁。なお, 同友会大学学長・社員教育委員長の関口功二郎氏が述べた卒業式式辞のテーマ「本当の闘いはこれから」は, 本記録集を発行するにあたって編集部が新たに(あるいは関口氏の内諾を得て)つけたと思われる。また, 式辞の後半部に「これからは本番だと肝に命じて下さい。」とあるが, これは, 「肝に銘じて」が正しい。これは, 関口氏の式辞の録音を文章化した時のミスか, 編集上のミスのどちらかと考えられる。

(注 7) 「人育ての真髄に迫る～同友会の共育理念～」, 北海道中小企業家同友会創立 30 周年記念誌, 西谷博明事務局長責任編集『共学・共育・共生の 30 年, 1969～1999』, 北海道中小企業家同友会, 1999 年 11 月 12 日, 256 頁。

(注 8) 国吉昌晴事務局長責任編集『同友会大学第三期生記録集, 闘志』, 前掲, 9 頁。

(注 9) 北海道同友会専務理事大久保尚孝「幹部としての誇りと自覚をもって期待に応えよう」, 前掲, 2 頁。

(注 10) 国吉昌晴事務局長責任編集『同友会大学第四期生記録集, 限りなき明日へ』, 北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行, 1983 年 1 月, 34 頁。

(注 11) 前掲, 2, 14, 23, 35, 39, 43, 48 頁。

(注 12) 前掲, 7～10 頁。

(注 13) 前掲, 10 頁。

(注 14) 前掲, 58 頁。

(注 15) 前掲, 42～43 頁。

(注 16) 前掲, 2 頁。